

語彙習得に関する文脈の及ぼす役割

本岡 直子*¹

The role of context in the acquisition of vocabulary

Naoko MOTOOKA*¹

Abstract

The acquisition of vocabulary has a large role in the learning of a language. Many ways are suggested to acquire a vocabulary. Some people learn a vocabulary by heart by making lists. Some people say that context must not be ignored in studying vocabulary and that to learn words separately from the context has little significance.

In this study, the effect of context in memorizing vocabulary was examined. The correlation coefficient for an English proficiency test and for English vocabulary memory span was also examined.

The results show that knowing the context has little effect on the short-term memory of English words, but, on the other hand, a vocabulary list is more effective in this case. Although slight, the relationship between English proficiency and the memory span for English was found, which suggests that the greater the ability the students have in English, the longer the vocabulary memory span is.

抄録

語彙習得は言語学習において大きな役割を担っている。その言語習得に対しては、多くの方法が考案されている。語彙表を作って覚えるやり方もあれば、語彙表で単語のみを覚えるやり方は意味がないと主張する人もいる。きちんと文脈を伴って覚えなければ語彙の本当の意味が理解できないので、文脈のなかで語彙を覚えるべきだと言う人もいる。

本研究では、語彙の習得をするための方法を考察するために、語彙を記憶する際の文脈の効果について検討を行った。英単語を記憶へ取り入れるためには、文脈を付帯した方がより効率よく記憶へ取り入れることができるかどうかを検証し、また、外国語の記憶域と習熟度の関係について、英語能力テストと語彙記憶量との関係を調べることによって検討した。

その結果、英語の単語を短期記憶の中に貯蔵するためには文脈がほとんど影響力を持たず、逆に、語彙表で覚える方がより短期記憶の中に入りやすいという結果が得られた。また、英語能力テストと英単語の記憶量との相関が若干見られ、英語能力が伸びれば伸びるほど、記憶量も増えるのではないかという示唆を与えている。

Key Words : vocabulary, context, memory, English education

キーワード : 語彙, 文脈, 記憶, 英語教育

はじめに一語彙指導の重要性

人間が言語を使用する際には様々なプロセスを経るが、外国語を使用する際はそのプロセスでいろいろな困難点を感じる。そしてその困難を克服するために、持たなければならない外国語の様々な学力がある。そのうちの大きな1つは語彙力であろう。たとえば、4技能の1つである読解力を例にとりあげると、それを構成する要素として「語彙力+文法知識+推理力」が

あげられているが、語彙力は必要不可欠の能力であると考えられている。その外国語の語彙力を伸ばすために、単語帳、または単語のみを集めた参考書で単語を覚える訓練をしたことがあるかもしれない。逆に、そのような覚え方に対して、単語は文脈の中で覚えなければ覚えられないと言われたことがあるかも知れない。目標以外の英語にふれるよりも目標とする英単語だけをリストにして覚えた方が、短時間で多くの単語を覚えられるとも考えられるが、文章中で単語を覚える方がよいという考え方は根強い。

* 1 広島県立保健福祉短期大学看護科 Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

最近、多くの研究において語彙習得の重要性が指摘されている。語彙習得が外国語学習にとって重要であることはCook(1991)が外国語学習の主要な学習分野は語彙であると述べているように、数多く述べられているが、その学習方法についてはあまり定まっていない。語の持っている特徴に着目させたり、絵などの視覚的な手助けを利用する場合もある。語呂合わせなどを利用したり、こまめな単語テストをする、辞書指導をするなど、語彙習得の方法には様々な習得方法が考えられるが、本研究ではまず、語彙を習得する第一段階としての記憶に焦点を当て、記憶力と外国語学習の関係をとらえ、文脈を付加して覚えた単語の方が、文脈の助けにより記憶の中に階層化されることができ、より短期であれ記憶の中にとどまることができるかと考えられるが、逆に、文脈を付加することは量においてより記憶に負担をかけるものであるから、結果として短期記憶にとどまることができるものが少なくなるとも考えられる。多くの学生が行っているような単語帳に英単語と意味のみを書いた表を覚えるやり方の方がより確実に記憶することができるか、それとも文脈を付加したやり方で英単語を記憶した方がより確実に記憶することができるかどうか、本研究から、より適切な語彙指導への示唆を得ることを目的とする。

人間の記憶システム

人間の記憶は、ある対象を1度に保持できる量に限界があり、また、その保持期間によって長期記憶(long-term memory)と短期記憶(short-term memory)に大別される。ふつう使われる記憶域は短期記憶の場面での能力で、人間が同時に取り扱える情報の量は、いろいろな対象についてみると(7±2)であるといわれている¹⁾。

外国語学習においても、記憶の果たす影響は大きいものであるが、Lado(1965)が指摘するように、外国語における記憶域は母国語と比べて短く、また、その記憶域はその言語習熟度に比例して増加すると考えられている²⁾。

人間の記憶システムについては、いくつかの仮説があるが、典型的な単純化されたモデルとして次のモデルがあげられる³⁾。(図1)

このシステムにおいては、システムがまず外部の環境から刺激を受けると、目や耳などの感覚器官を通して、システムの中に入り、最初に情報が蓄えられる貯蔵庫である感覚貯蔵庫にはいる。この感覚貯蔵庫は感覚器官にはいったすべての情報を保持するほど大量の情報をいれることができるが、たいてい1秒以内に減衰してしまう。

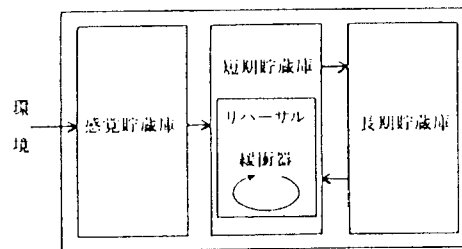


図1 人間の記憶システム (安藤他:1991)

感覚貯蔵庫にはいった情報の一部は短期貯蔵庫に移され、情報はここではじめて意識にあがるといわれている。しかしながらこの情報はたいてい15秒以内に失われる。また、あまり大きくない貯蔵庫で、電話番号1つ程度の保持しかできないところである。これが短期記憶である。Millerはその容量を7±2としたが、その単位としては、1つの数字や文字に限られるのではなく、音節、語、句、文など、人が1つの単位として認めるものであれば何でもよく「チャンク」という単位で表される。ただ、短期貯蔵庫内の情報をリハーサルすれば、その情報はいつまでも保持することができる。ただし、リハーサルしている間は、それに意識が集中してしまっているので他の情報はすべて短期貯蔵庫から失われてしまう。

長期貯蔵庫は情報をほとんど恒久的に蓄えることができ、しかも記憶容量は非常に大きい。これが長期記憶で、短期貯蔵庫から長期貯蔵庫に情報が送られるのは、その情報が既存の知識構造に関係づけられ、体制化された場合である。長期貯蔵庫内の情報は、基本的には意味的であり、またスキーマの考え方にもあらわれているように体制化されて保持されている。

スキーマは、各個人の雑多な知識や経験が構造的知識として記憶された先行知識(prior knowledge)で、記憶の呼び出し、判断、理解等あらゆる認知活動に関与するといわれている⁴⁾。読解の過程を説明する理論として近年取り上げられており、この各自が持っているスキーマをうまく活性化することにより、記憶への保持、および呼び出しがスムーズに行われ、理解等の認知活動をより容易に行うことができるのである。

語彙学習と記憶のメカニズムについてStevick(1982)は、新しく覚えた単語を思い浮かべるときには、その語とその語にかかわる他の情報(本のページとか、人から聞いたのならそのときの声の調子など)と結びついて思い出されるものだと述べている⁵⁾。そのことから考えると、語彙の習得には、語彙が使われた状況がスキーマとして記憶の中に構築されていくことが考えられる。

また、Stevickは、記憶には短期記憶と長期記憶、永続的記憶があり、長期記憶は刺激の頻度 (frequency) と強度 (intensity) の影響を受け、永続的記憶は強度が必要だと述べている。

文脈が単語理解に及ぼす役割

語彙習得方法に‘キーワード法’という語の覚え方がある。キーワード法とは、覚えたい単語(目標語)と似た音を含む語(キーワード=key word)を設定する。キーワードは学習者がすでによく知っている語を選び、目標語とキーワードを視覚イメージまたはストーリーで結びつける。この結びつけは全くのこじつけでもかまわなく、次のようなものである⁹⁾。たとえば覚えたい目標語をcarlin(老婆)とすると、キーワードをcarとし、視覚イメージは、The car is driven by an old woman.というイメージで覚える。そうすると、次にcarlinという言葉に出会ったら、次のように連想が働いて語義を思い出すという



図2 キーワード法の例 (語学研究所第21グループ:1996)

ものである。(図2)

このキーワード法が語彙の習得に関して有効であるといわれており、市販の受験用の学習参考書などの単語の連想記憶術は、このキーワード法に基づいたものであると考えられる。しかしながら、このキーワード法は目標語を文脈から切り離し、語義を覚えるという手段であるため、語彙習得法としては限界があるという批判もある。

与えられた言語表現を理解するためには、その言語表現に付帯する文脈・状況、そして心内にある知識を総合して理解することが必要で、心内にある知識の一つとして考えられているスキーマの影響力については、先に述べたとおりだが、それでは、文脈とはいったい何であろうか。与えられた言語理解を助けるものであると同時に言語理解には文脈がなければきちんと成り立たない場合がある。

言葉の意味というものは、音声や文字列などの“言語表現”と聞き手や読み手の心内にあるさまざまな“知識”の両方がありさえすれば一義的に定まるといえるものではなく、“文脈”や“状況”に依存しても変わるものである。日本

語においても英語においても、たくさんの同意語があるが、文字のみでは理解できないが音によって違いが理解できる場合、逆に音のみでは理解できないが文字によって違いが理解できる場合がある。たとえば、日本語における“くも(雲)”と“くも(蜘蛛)”, 英語の“ice cream”と“I scream.”はそれぞれ、文字のみ、音のみでは他の異義語に間違える場合がある。このような場合、その言語表現に付随する文脈で、その目的の言語理解を行う。文脈の定義について、阿部ほか(1994)にもとづいてまとめると以下のようになる⁹⁾。つまり、人間が文章理解を行う過程において、人間は長い文章全体を一瞬に読み取り理解してしまうことはできないため、ある瞬間に処理の対象となる言語表現は部分的なものとなる。その言語表現は、阿部によると“ターゲット(target)”と称され、それぞれの研究作業においてそのターゲットの大きさをどのような単位で捉えるかは、相対的な問題となる。すなわち、それは、どの大きさの言語単位の処理に興味があるか、どの大きさの言語表現に焦点をあてるか、で決まり、その単位は、文字や単語である場合もあるし、句や節や文、あるいは文章の一つの段落や一つの章全体である場合もある。たとえば、単語という単位での処理に興味がある場合には、ターゲットの大きさは単語となり、それ以外の周りの言語表現はすべて“文脈(context)”ということになる。つまり文脈とは“ターゲットの周りに存在する言語表現”と定義することができるであろう。

読み手は、普通、文章を前のほうから順に読んでいくため、ある部分まで読んだ時点での文脈とは、すでに読み終わった単語や句や文など、先行する言語表現ということになる。読み手はターゲットを処理するために先行文脈から得られる情報を利用する。しかし、時には、後続する言語表現も文脈として利用することがある。

このように文脈や心内の知識を利用して言語表現の理解を行おうとするが、ある言語表現を処理している過程では文字や単語のレベルから、ある小説の結末にいたるまでの内容のレベルなど様々なレベルで、認知的処理を十分に行うためのある種の短期記憶が必要とされる。本研究において取り上げる短期記憶は、単語認知またはその単語に付帯する文脈を取り扱うレベルである。

語学研究所第21研究グループ(1996)⁹⁾は、語彙習得に対する文脈の及ぼす役割について短期記憶のみならず長期記憶に関しても取り上げた研究を行い、文脈に付帯して単語を覚えた方が、より、長期に保持される可能性を示唆している。高校2年生を対象に語の意味の想起における文脈利用の研究を行い、直後のテストにお

いては、単語のみの提示で未知語の60%を思いだし、文章を見せるとさらに17%以上の単語を思い出すという結果を得ている。また同様に1カ月後に行ったテストにおいては、単語のみで20%、文章を見るとさらに16%思い出すという結果を示している。時間が経過すると文脈を見て語の意味を思い出す割合が増えており、単語習得に関して文脈が影響を及ぼす、特に長期記憶に関して文脈が有効に働くということを示している。

また、Kellogg(1996)の研究では、単語の習得の際の3つの手がかり(日本語の意味を並べた日本語リスト、英語による註を並べた英語のリスト、および英和辞典の使用)が単語の保持に与える影響を調べているが、その結果、「日本語リスト」群および「辞書使用」群の成績が他のグループよりも有意に高く、授業中の英和辞典や日本語の使用が、授業終了直後の語彙再認に対して有利であると示唆している。しかしながら、この研究においては一週間後の標的語の保持量については、習得の際の手がかりによる再認成績の違いは検証されていない。¹⁰⁾

本研究の目的

以上のような理論をふまえて、本研究においては、以下にあげる点を明らかにすることを目的とする。

1) 英単語を短期記憶へ取り込む際には、文脈を付帯して学習者のスキーマを活性化して取り込む方がより多くの量を一度に取り込むことができるかどうか

2) 外国語における記憶域は母国語と比べて短く、またその記憶域はその言語習熟度に比例して増加するかどうかについて検証する。

実験

1. 実験対象

短期大学2年生 58名

2. 実験方法

記憶の対象として、日本語の単語10語(名詞5語(うち固有名詞1語)、形容詞3語、動詞2語)、4桁の数字10個、英語の単語(名詞5語(うち固有名詞1語)、形容詞3語、動詞2語)およびその意味10組を準備する。4桁の数字については、コントロールグループについては数字のみ、実験グループに与える数字には、単なる数字のみではなく、その数字に意味を付加するものとして、車のナンバーであることを示し、車種とともに提示した。英語の単語は、学習者

にとって未知であると予測される単語を選んだ。

実験対象者を2グループに分け、1グループをコントロールグループ(Aグループ)とする。

Aグループ(29名)は

1. 日本語の単語10語(30秒)
2. 解答用紙(「覚えた言葉を書きなさい(順不同)」)
3. 4桁の数字10個(30秒)
4. 解答用紙(「覚えた数字を書きなさい(順不同)」)
5. 英語の単語およびその意味のみ10組(1分)
6. 解答用紙(「次の単語の意味を書きなさい」)

が1セットとして与えられる。

Bグループ(29名)は

1. 日本語の単語10語(30秒)
2. 解答用紙(「覚えた言葉を書きなさい(順不同)」)
3. 4桁の数字およびそれが車のナンバーであることを表すための車種10組(30秒)
4. 解答用紙(「覚えた数字を書きなさい(順不同)」)
5. 目的となる英単語を含んだ英文10文および、その英文の日本語訳10組(1分)(目的となる英単語、およびそれに対応する日本語に下線—資料1)
6. 解答用紙(「次の単語の意味を書きなさい」)

が1セットとして与えられる。

まず、単語の書いてある紙を30秒間見て、覚える。30秒たつと、その次のページの解答用紙へ進み、覚えている単語を書く。同様に、4桁の数字、英語の単語ともそれぞれ指定された時間ずつ、覚えて書くという作業をする。

また、別の時間に英検二級程度の内容及び難易度の英語学力テストを行う。

3. 結果

採点は、完全正答で、各10点満点で採点する。

結果は、以下の通りである。(表1)

日本語単語の記憶に関して、AグループとBグループの間に有意差は見られなかった。

また、4桁の数字の記憶に関しても、2グループ間に有意差は見られなかった。

しかしながら、英単語の記憶に関して、 $p<.05$ で2グループ間に有意差が認められた。

また、英語学力テストとの相関については、日本語の単語の記憶、数字の記憶についてはほとんど相関が見られなかったが、英語の単語の記憶について、411と低いながらも相関が見られた。

名詞、形容詞、動詞の品詞別の記憶量におい

表1 各グループ平均値

	Aグループ			Bグループ		
	平均	標準偏差	最高点	平均	標準偏差	最高点
日本語の単語	8.2	1.8	10	8.7	1.4	10
数字	4.3	1.4	7	4.1	1.8	8
英語の単語	4.6	2.5	9	3.1	1.6	6
英語学力テスト	63.3	14.4	86	57	15.2	86

ては、日本語においても英語においても、名詞は、形容詞、動詞に比べて多くの量を記憶していた。(p<.05)

考察

以上の結果を考察してみると、英語学力テスト、および日本語単語の記憶に関して有意差が認められなかったということは、この2グループが等質であるということを示しているが、その等質の2グループが異なった提示のされ方をした英単語の記憶に関しては、有意差が認められている。つまり、英単語を短期記憶へ取り込む際には、文脈を付帯して学習者のスキーマを活性化させて取り込む方がより多くの量を一度に取り込むことができるということはいえないと考えられる。逆に、短期記憶へ取り込むためには目標となる英単語をリストの形にして記憶した方がより多く記憶できる可能性を示唆している。

4桁の数字の想起については、車の車種を示して、この4桁の数字が車のナンバーなのだというヒントを与えた方が、学習者がスキーマを活性化でき、その働きによってよりよい想起率を示すと仮定していたが、結果としては2グループ間に差がなかった。この結果も同様に、短期記憶への取り込み、または記憶の想起の際に車のナンバーだというヒントは意味を持たず、学習者のスキーマが活性化しなかったと考えられる。

また、もう一つのポイントである、外国語における記憶域は母国語と比べて短く、またその記憶域はその言語習熟度に比例して増加するかどうかについては、日本語の単語の記憶と英単語の記憶に関しては、明らかに母国語の記憶域の方が長いということがいえる。また、外国語の記憶域は、外国語の習熟度に比例して増加するという点については、英語学力テストと英語の単語の記憶に対して低いながらも相関が見られたことから、そのような傾向が認められると考えられる。

まとめ

外国語学習において、語句を記憶することは大切な学習活動の一つであり、言語習得の成功度と記憶力とは大いに関連があり、工夫することによってその記憶が促進できる。そのような記憶術 (mnemonicsまたはmnemotechnics) については、外国語の語彙学習において、どのような記憶術があり、どの方法が最も効果的であるかについてはこれからの研究が待たれるところではあるが、その暗記のための1つの方法として、表をつくって覚える方法も無駄ではないということが本研究から言えるのではないだろうか。文脈を伴って覚えるやり方に加えて、時には目標となる単語をリストにして一度にたくさん単語を短期記憶に入れリハーサルを繰り返すという方法を取り入れることで語彙習得につながると思われる。

本研究において、語学教育研究所第21グループ (1996) とは同様の結果がでていない原因の一つとして、文脈の長さがあげられるであろう。語学教育研究所の行った実験に対して本研究での付帯した文脈が長かったことが考えられる。語彙指導に対して、単語を提示する際の付帯する文脈はあまり長い文でない方がよいといえるのではないだろうか？長い文脈の場合は、目標語がはっきりしないという欠点があり、と同時に短い記憶域に余分な負担をかけると考えられる。

また、どちらかといえば、形容詞、動詞に比較して名詞の方が記憶されやすい傾向があると考えられ、このことから指導法として、まず名詞を中心に学習者に語彙を与えて外国語の記憶域を長くしたあと、徐々に他の品詞を取り入れていくやり方を提唱することもできる。

また、日本語の記憶域の量と英語の記憶域の量には相関は見られず、英語能力と英語記憶の量に低いながらも相関が見られたということから、外国語の語彙習得は記憶力だけの問題ではなく、外国語能力を相対的に伸ばすことによって外国語の語彙に対する記憶域が広がると考えられる。語彙を習得することで外国語能力を伸ばすことができ、そして外国語能力が伸びることによってまたより多くの語彙を習得することができるようになるのである。

ただ、語彙の指導＝効率よく単語を覚えさせ

ることではない。語彙の指導に関しては、語の形態を教えること、語の意味を教えること、語の形態と意味とが結び付いているという事を教えることという3つの側面を認識しなければいけないといわれる³⁾。dog=犬と覚えさせるのではなく、Pocket Oxford Dictionaryで'noted for serviceableness to man in hunting, shepherding, guarding, & companionship'と定義づけられるようにその概念までを指導するものであれば、語彙の指導と文脈とは切り離せないものであるだろう。「指導」ということを考えた際には、ただ「単語を覚えなさい」という指示を与えるのみで、学習者が単語表を機械的に暗記していくということではいけないのである。質、量を兼ね備えた語彙習得法の模索が必要とされる。

文献

- 1) Cook, V.: Second language learning and language teaching. London, Edward Arnold.1991; 米山朝二訳. 第2言語の学習と教授. 東京, 研究社出版. 1993
- 2) 垣田直巳: 英語科重要用語300の基礎知識. 東京, 明治図書. 1981
- 3) Lado, R.: Memory span as a factor in second language learning . International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 3: 2; 123-129.1965
- 4) 安藤昭一ほか: 英語教育現代キーワード事典. 東京, 増進堂. 1991
- 5) Rumelhart, D.E.: Schemata: the building blocks of cognition. Spiro, R.J., Bruce, B.C. et al. Theoretical Issues in Reading Comprehension, Hillsdale, N.J. Erlbaum. 1980
- 6) Stevick, E.W.: Teaching and learning language. Cambridge Univ. Pr., 1982
- 7) 語学教育研究所第21研究グループ. 基礎からの語彙指導[4]キーワード法. 現代英語教育, 33: 4; 50-51, 1996
- 8) 阿部純一, 桃内佳雄ほか: 人間の言語情報処理—言語理解の認知科学—. 東京サイエンス社. 1994
- 9) 語学教育研究所第21研究グループ: 基礎からの語彙指導[5]英単語学習と文脈. 現代英語教育, 33: 5; 50-51, 1996
- 10) Kellogg, G.: Research on vocabulary retention. On JALT 95: Curriculum and Evaluation. 215-219. Tokyo, 1996

資料1

It is a matter for joy that young men's physique has very much improved.

(若い人たちの体格が非常によくなったのは喜ばしいことである。)

Far from falling, the prices of commodities went on rising.

(商品の値段は安くなるどころか高くなるばかりだった。)

This is where Charlemagne determined that he would build a canal.

(ここがシャルルマーニュ大帝が運河をつくろうと決めた場所です。)

The police should take sterner measures against felonies committed by gangsters.

(警察は暴力団の犯した重罪に厳しい処置をとるべきだ。)

He lost the greater part of his fortune in speculation.

(彼は投機に手を出して財産の大半を失った。)

The people went ecstatic over the local team's victory in the baseball tournament.

(人々は野球の試合での地元チームの勝利に有頂天になった。)

The repeated typhoons had the cumulative effect of severely damaging the apple crop.

(台風が何度も来たせいでリンゴの収穫は累積的なダメージを受けた。)

It is well known that Japan was a feudal state.

(日本が封建的な国であったことはよく知られている。)

The momentum for peace will dissipate.

(平和への気運は消失してしまうだろう。)

That dog over there can be dangerous. Don't provoke it.

(あそこの犬は危険です。怒らせるな。)